



## 「頑張れ」に思うこと

毎月幼児の子どもたちと運動あそびを行っています。年長の子どもたちは現在、跳び箱をしています。4月の時に年長の女兒が、跳び箱を跳べないことが悔しくて泣けていました。そこから数日間、私を見つけると近づいてきて「私、跳び箱頑張るね！」と話をしに来てくれました。

その女兒が「漢字じゃなくて、私の読める字で「がんばれ」って、お手紙書いてくれる？」と私のところへ言いに来ました。

私はその当時、運動は頑張るよりも楽しむものであると思っていました。また年長児の4月は、本人も知らない間に気を張って生活しているので、これ以上「頑張れ」と負担をかけたくないと思い「また、跳び箱一緒にやろうね」と平仮名で書いて渡しました。



数日後、渡した手紙の内容を思い返して、「頑張れ」と励まして欲しい女兒の気持ちに自分は応えられていないこと、運動と一緒に楽しもうという気持ちも伝えていないことに気づきました。

その気づきを行動で挽回しようと、5月の運動遊びの跳び箱は、手の付き方や場所を伝え、複数回の挑戦する機会を設けました。複数回やるうちに、前回跳べなかった段数を跳ぶことができ、一緒に喜び合うことができました。

子どもたちは身近な大人に励まされることで安心して、自分を奮い立たせ目標に挑戦します。最近「頑張れ」が子どもの負担になったり、言われ続けると気持ちが沈んだりする等と言われ、応援することを避け、子どもが自ら選んで、進んでやることだけが正しいような風潮があります。

しかし、子どもが一人で黙々とやるだけでは、人と一緒に感情を交流する機会が激減してしまいます。私たちは、能力を伸ばす以上に楽しい、嬉しい、面白い、不思議等と子どもの心が躍る瞬間と一緒に、又は仲間と共に過ごして欲しいと願って関わっています。

その感情交流する機会の土台となるのは安心感です。子どもが本当にやれない時、無理だなと思った時に「今はできない。」「休みたい。」と言える日頃の関係を育むことが、子どもが「頑張れ」の言葉を素直に受け止め、前を向く力になるのだと考えさせてもらった年長女兒とのやりとりでした。

## 地域のみなさんとの交流

地域の皆様が来園し、年少・年中の子どもたちと交流をしてくださいました。

輪投げや紙芝居の読み聞かせ、手品をしてくれたり、ウクレレ演奏、フラダンスをしてくれたりと、日頃培っている技を、子どもたちに披露してくれました。

子どもたちは、歌やダンスが終わるたびに「もう1回やって！」と喜んで参加していました。子どもたちの声に応じて、色々やってくれていました。

子どもたちは、「つばめ」の歌を披露しました。「1曲かあ。」と声があり、もっと子どもたちの姿を見たい思いが伝わってきたので、日頃やっているリズムを披露しました。

地域の方たちに支えられ、園を通じて様々な世代が交流し合う機会があり、温かい人間関係の中で保育園を運営できているありがたさを実感することができました。今後も地域の方と一緒に、子どもたちの育ちを喜び合える関係作りに進めていきたいと思っています。

